

# カードーズの地代理論をめぐって

リカードとカードーズのあいだ

三 辺 清 一 郎

ま え が き

19世紀のはじめ、アメリカに移入せられたものは、当然イギリスの古典学派の経済学であった。そこでは、アダム・スミスの「諸国民の富」(1776年)は、思索的でないひとびと the unphilosophical mind には難解とせられながらも、1789年以来、版を重ねていたし、リカードの「経済学および課税の原理」(1817年)も普通のひとびと the average mind に“深かすぎる”とは解されていたが、高く評価されていた<sup>1)</sup>。そのなかにあって、カードーズは、リカードとおなじく独学のジャーナリストであったが、南北戦争以前のアメリカで、リカードとその一派の業績を特徴づける、かの高い水準の抽象力の唯一の持ち主であったとせられる<sup>2)</sup>。かれはその抽象力で、リカードの地代理論にたいして、精緻な分析と批評を加えた。本論文では、その理論をたどってみたのである。

1) Joseph Dorfman: The economic mind in American civilization, 1606—1865. vol. 2. p. 512-13.

2) Ibid. vol. 2. p. 551.

## I

デーヴィッド・リカード David Ricardo がその「経済学および課税の原理」On the principles of political economy and taxation. 1817, 2. ed. 1819, 3. ed. 1821. の「地代論」の章のはじめに与えている地代について

の定義は、「かれの〔地主の〕土地の生産物中、土壤の本原的、不可滅的な力 *the original and indestructible powers* の使用にたいして、地主に支払われる部分である」ということである<sup>19</sup>。この定義は、(1)地代は土地の生産物中、`土壤の本原的な力、にたいして支払われる部分である、しかもその`本原的な力、は`不可滅的、であるということ、および(2)、それは地主にたいして支払われる、ということの内容としている。そして`かれの、という言葉が、`地主の所有する、土地という意味であるということ、いうまでもない。

J. N. カードゾ Jacob Newton Cardozo はこの定義のはじめの部分に関して、この定義にしたがうと、「地代は〔土壤の〕の`自然的、沃度 *natural fertility* によって左右される」<sup>20</sup> といっている。ここではリカードの定義の「本原的、不可滅的な力」は「自然的沃度」という同意語にいかえられ、また土壤の本原的な力なり、自然的沃度が、地代の源泉 *origin*<sup>21</sup> であることが明言されている。このことを理解しておくことは、カードゾの地代理論をたどるうえにおいて重要である。かれは、自然が「生活技術」*the arts of life* のあらゆる分野において、「使用と交換の対象となる諸物に価値を付与する際に、人間に与える協力」を見ることが厚かった。かれは「この見解にしたがえば、土地じしん（それに加えられる肥料〔土地の改良〕とは独立に）、強力な自然要因であって、それは、空気や雨や太陽とともに、等しく耕作者の労働を助ける」といっていた<sup>22</sup>。

リカードは、地代という言葉は、俗用語としては、「農業者によって年々地主に納付せられるものは、なににかぎらず適用せられ、」また「しばしば資本の利子および利潤と混同せられる」ことに注意し<sup>23</sup>、かれの著書では、地代というときは必ずうえのように、「土地の本原的、不可滅的な力の使用にたいして支払われる報償」を言うものであることを明言している<sup>24</sup>。しかしリカードがその「原理」で実際に展開していたものは、結局は土壤の自然的沃度の差にもとづく各種土地の生産物の差額が、地代を構成する

という、いわゆる「差額地代」の理論であった。差額地代は、土壤の本原的不可滅的な力、あるいは自然的沃度そのものを発生原因とする「本来の地代、——という言葉でここで用いるのが便利だともう——とは違う。カードーズは、地代の「起原、origin を土地の「質の差」 different qualities に求めるリカードは、地代を土壤の「相対的沃度」 *relative fertility* によって説明するものである。相対的沃度は、地代の「不等、inequality を説明するだけで、本来の地代の起原を説明するものでない、と批評している<sup>7)</sup>。

カードーズは、土壤の「本原的、不可滅的な力」すなわちその自然的沃度は増減しない。それは「減少を許さないように、増加も許さない」<sup>8)</sup>と考えた。リカードの差額地代の理論によれば、第2級の品質の土地が耕作に取り入れられるまでは、第1級の質の土地に地代が初まる *begins* ことは、けっしてない。また第3級の土地が耕作にもたらされるまでは第2級地の地代が増加しない道理であった。しかしカードーズは、「かりにも地代が「土地の生産物中、土壤の本原的、不可滅的な力の使用にたいして支払われる部分、であるとするならば、その量は、これらの力に比例しなければならない。しかし劣級の土地が耕作に取り入れられたからとて、これらの力が変化するわけではない。それらは、絶対的沃度 *absolute fertility* としては、依然本原的のままにとどまるだろう。」「地代の差は沃度の差の生むところだ」 *Land of different degrees of fertility will yield different rent* といっていた<sup>9)</sup>。

- 1) David Ricardo: *On the principles of political economy and taxation*. 3. ed. 1821. *The works and correspondence of David Ricardo*. ed. by Piero Sraffa. vol. I. 1951. p. 67. 小泉信三訳、改訂「経済学及び課説の原理」岩波文庫版、上巻、p. 56.
- 2) J. N. Cardozo: *Notes on political economy*. 1826. Reprint of economic classics (Kelley's ed) 1960. p. 19.
- 3) *Ibid.* p. 20.

- 4) Ibid. p. 6.
- 5) D. Ricardo: The principles of political economy and taxation. The workes. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 67. 小泉訳, 上巻 p. 56.
- 6) Ibid. vol. I. p. 68—69. 小泉訳, 上巻, p. 58. リカードも公式の定義としては, 「土地の〔自然的〕沃度が地代の基礎であると考えていたのである。」 (J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 33)
- 7) Ibid. p. 20—21
- 8) Ibid. p. 21.
- 9) Ibid. p. 21.

## II

うえに述べたように, カードーズによれば, 土壤の「本原的, 不可滅的な力」は増減しない。けれども「土地の生産諸力」The productive powers of the land は, 増加し得る。そしてそれは「取得せられた沃度」acquired fertility によるものだと, かれはいう<sup>1)</sup>。この「土壤の追加的生産性」the additional productiveness は, 「耕作者の熟練 skill, 資本および創意 ingenuity から」くるものである<sup>2)</sup>。これらはリカードでは「農業上の改良」とよばれた<sup>3)</sup>。リカードは, それらを, ひとつの個所では, 「改良された農場」について観察し,

A. 具体的に, 農場用建物の一切の利便, 適宜な排水, 施肥, 障壁垣(かき)籬(まがき)による隣接農場からの分離を挙げ, (1) 土地の品質の改良と (2) 生産物を確保保存するために必要な建物の建築とに投ぜられた「資本の使用」The use of the capital に由るものと考え<sup>4)</sup>,

またいまひとつの個所では,

B. (1)土地の生産力——「土壤の本原的, 不可滅的な力、ではない。これはカードーズによれば, 増減できないはずのものである——を増進せしめた改良——これは資本の投入を必要としない, より巧妙な輪栽法とか, いっそう宜しきをえた肥料の選択とかいったものを含み, われわれに, 絶

対的に同一の収穫をより小さな面積から得せしめる——<sup>5)</sup>と、

(2) 土地の耕作そのものよりも、むしろ「土地に加えられる資本の形成」に向けられるもの、——たとえば、鋤、打穀機のような農業用具の改良、耕耘用馬匹の使用上における節約、および家畜病治療法の進歩のような土地の生産力は増加させないが、しかしその生産物をより少ない労働で獲得せしめる——と

にわけて考えた<sup>6)</sup>。

以上のうち、B—(1)をのぞき、それら農業上の諸改良は、すべて「資本の形成」に関係し、「資本の使用」に由来するところである。すなわち、それらはすべて土地の「生産力、(＝生産性)を増大するが、それはすべて土地に投下された資本量の増加によるところにはかならない。これらは土地の「本原的な力、とはなんの関係もない。したがってリカードは、地代はしばしば資本の利子および利潤と混同せられるけれども、「地代の増減を支配する諸法則は、利潤の増減を支配する諸法則とは大いに趣きを異にし、その同じ方向に作用することは稀れ」であるから、この2つを区別することは「地代および利潤に関する研究において極めて重要である」としていた<sup>7)</sup>。カードーズもこの点については、リカードと同意見であって、かれは、「もしも全生産物の増加が、耕作者たちの熟練と資本との結果であったとしたら、地主はその全生産物の「増加配分、にたいして、どんな資格をもつかを尋ねて、つぎのように考えた。もしも地主がこの増加がえられるために、いくらかの資本を出していたのであったとしたら、かれの配分はかれの投資＝出資に比例するだろう。かれがそれよりもより大きい配分を受け取るとすれば、それは、農業者たちが「かれら、の資本と熟練とから受け取る資格をもつ配分の一部が移転されたものにかならないだろう。だから、「もしも耕作の拡張が、地主たちからのなんの援助もなく、耕作者らによって単独に行なわれたのであるとするならば、その耕作の拡張は、耕作者たちじしんの改良の結果であるのであるから、この耕作

の拡張から生まれる増加生産物の「全部」は、専ら耕作者の所有権に属する。したがってまた「当然」に、この生産物の増加からは地代の増加が生まれることはできない。」また反対に、もしも土地の生産力（土壤の本原的な力でない。さきにもいったように、この力はカードーズによれば、増減できないものであった）が農業者によってそこなわれたとしたら、農業者はそれをもとどおりに回復するか、あるいは地主にたいして、土壤が受けた損害の程度に応じてかれに償うであろうような額のものを与えなければならない。またこうした賠償は、それゆえに「土地の自然的沃度に比例して土地から引き出される地代の量には、なんの差異も与え得ない」と結論した<sup>89</sup>。

しかしかれは、農業上の諸改良にもとづく「取得せられた沃度、したがってまたそれに由来する利子および利潤が、土壤の「本原的な力、（自然的沃度）に由来する本来の地代と混同せられるについては、「製造業における熟練および科学の諸結果は、あらゆるひとの眼に見える——それらは機械に具体化されている。けれども農業にあっては、それらは土壤の一部になりきって、あるいは混合して、それと区別することができない」<sup>90</sup>ことをいっていた。そしてまたこの観点から、かれは、土地を、本質的には「一個の道具」an instrument であるという考え方を発展させた<sup>100</sup>。かれは、土地の自然的沃度は増減しないと考えるものであったから、かれにあっては、地代の量は変化しないが、しかしその変化しない量は、「資本の借り主によって生産的に使用せられる借入れ金にたいする利子を支配すると同じ法則によって支配されなければならない」としていた<sup>110</sup>。この点については、なおのちに触れるところがあるであろう。これは後のマーシャルの準地代 the quasi rent の発想につながるものと考えられる<sup>120</sup>。

つぎに、さきにのけて考えた農業上の諸改良 B-(2) すなわちより巧妙な輪栽法、あるいは肥料の選択といった改良について考える。これらは、カードーズの言葉を用いれば「耕作者の熟練……および創意」<sup>130</sup>によるもの

であって、「資本の使用」の関係するところでない。それらはいわば経営組織または経営技術の改善であって、同一額の資本および労働の投下によって、より多くの産出を得ることを意味する。それらは、現代では資本と経営と分離した株式会社における企業者所得に相当し、いずれにしても地代を構成するものではない。ここで考察せられる時代にあっても、それらはむしろ労働の質の改善に関係し、もしそれらの能力によって生産物の増加がえられるとすれば、その増加は、正常な分配では賃銀に帰属すべきものである。リカードも当然のことながら、賃銀を支配する諸原理と「利潤を支配する諸原理」<sup>14)</sup>とを区別して考え、「穀物および製造品がつねにおなじ価格で売れるものと仮定すれば、利潤は、賃銀が低いか高いかに応じて、あるいは高く、あるいは低く、」「賃銀の騰貴に比例して利潤の下落する」ことをいっていた<sup>15)</sup>。

農業上の改良が行なわれたばあい、農業者らがじぶんの投じた資本からして受け取る資格のある増加分は、もちろん利子あるいは利潤の源泉であり、そしてその熟練および創意からする増加分が賃銀であるべきことはいうまでもない。しかしカードゾはこの点に関してはあまり嚴重でなかった。この節で引用したところだけでも、かれはあるいは「耕作者の「熟練、資本および創意、からする土壌の追加的生産性」といい、あるいは「もしも全生産物の増加が、耕作者たちの「熟練と資本、との結果であったとしたら」とか、また「農業者たちがかれらの「資本と熟練、とから受け取る資格をもつ配分」とかいて、土地の生産力の増加する要因としての熟練および創意と、資本とを区別する表現を用いなかった。しかしそれについては、かれはかれなりに理由をもっていたのもあった。すなわちかれは、これらの2つの所得、賃銀および利潤の増減を支配する原理 the principles なり法則 the laws は、はなはだしく類似しており、その国民的な改善の進歩にたいする効果においては、ほとんど同じであって、これを区別することは不可能にちかく、また必要もない、と考えていたのである<sup>16)</sup>。

- 1) J. N. Cardozo: Notes on Political economy. p. 21.
- 2) Ibid. p. 21.
- 3) D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. Works. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 79. 小泉訳, 上巻, p. 69.
- 4) Ibid. vol. I. p. 67. 小泉訳 上巻, p. 56-57.
- 5) Ibid. vol. I. p. 80. 小泉訳, 上巻, p. 70, 71.
- 6) Ibid. vol. I. p. 80, 82. 小泉訳, 上巻, p. 70, 73.
- 7) Ibid. vol. I. p. 67-68. 小泉訳, 上巻。p. 56-57.
- 8) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 21-22.
- 9) Ibid. p. 36.
- 10) J. N. Cardozo: Political economy—rent. in the “Southern Review.” 1828. In Cardozo: Notes on political economy. Kelley’s ed. p. 200. カードローズはそこで「農業は製造業の第1段階に過ぎない」とさえ言っていた。(Ibid. p. 200.)
- 11) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 26-27.
- 12) cf. Alfred Marshal: Principles of economics. 8. ed. p. 63. 大塚金之助訳, 「経済学原理」第1冊, p. 155.
- 13) 上注 2) 参照。
- 14) D. Ricardo: On the principles of political economy. Sraffa’s ed. vol. I. p. 102. 小泉訳, 上巻, p. 94.
- 15) Ibid. vol. I. p. 110-11, 小泉訳, 上巻, p. 103-04.
- 16) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 39.

### III

リカードがみずから下した「地代は土地生物産中、土壌の本原的、不可滅的な力〔自然的沃度〕の使用にたいして支払われる部分である」という定義にもかかわらず、かれじしんの実際に展開したものは、差額地代の理論であったことはさきに述べた。その際かれは、「最初の植民が豊饒肥沃な土地が十分に存在して」しかも「まだ占有せられない」国に行なわれることを前提としていたのである<sup>1)</sup>。これはアダム・スミスの「資財の蓄積と土地の占有、との双方に先行する初期未開の社会状態」の国々に入植したことを意味する<sup>2)</sup>。そういった国々では、土地は自由財であるから、



その使用にたいして支払いがなされるということはない<sup>1)</sup>。すなわち「普通の需要供給原理にもとづき、空気および水の使用にたいして、なんらの代償の与えられることがないと同一の理由によって、こうした土地にたいしては、なんらの地代の支払われるべきはずはない。」<sup>3)</sup>

カードーズは、「絶対的ないし自然的沃度」absolute or natural fertility の利益をつよく主張するマルサスに賛成して、「地代は土地が耕作に取り入れられるそのときから、初まる commense」と考えた<sup>4)</sup>。かれは、リカードは新しい国々では土地が豊富であって安い、という事情に大へんに力点をおいているが、土地は、豊富だからといって、無償で得られるということはない。「土地が耕作者にたいして利潤のために利用できるときに、どこでも、価格あるいは価値がないように無限量に存在するというのは、事実ではない。」リカードは、「存在しないことを仮定する」ものだ、とかれは考えた。「土地は所有できる capable of appropriation — 空気や水はできないが。土地はそれが豊富であるために、価値が“ほとんどない、little value”ということはあるかも知れない。またある土地は、市場から遠いというので、買手や借主がいらないというところから、荒地のままに残されるということがあるかも知れない。」しかし「真の問題はこうである。土地が資本の普通利潤および労働の普通賃銀<sup>5)</sup>以上に産出できるようにされうるときに、だれが価格または地代の支払いなしで所有もしくは占有を許すか、ということである」とかれは言っていた<sup>6)</sup>。かれがマルサスに賛成して、「地代は、土地が耕作に取り入れられるそのときから、初まる」といったときには、かれは「一国の最初の入植のさいにおける土地も、投資として買い取られることを想定し、また土地所有者が、その耕作のために賃貸 hiring を選ぶことを仮定して」いたのである。そのようなばあい、「土地が賃銀および利潤に加えて、地代を支払うに十分な生産物量が産出するようにされたそのときから、地代が引き出されないということがあろうか」とかれは言う<sup>7)</sup>。かれはスミスの「ある国の土地がすべて

私有財産となるやいなや」と言った状態から出発しているのである<sup>8)</sup>。

うえにみたように、カードーズは、土地——および<sup>ストック</sup>資財——について所有権の成立をみているが、しかし「その土地の獲得の容易な新しい国への入植」<sup>9)</sup>を考えていたのであった。しかもカードーズは、そのうえ、「土地が『自由競争、free competition の価格で得られる』こと<sup>10)</sup>、「土地が売買なり地代なりのために、自由に市場にのせられる」こと<sup>11)</sup>また「無制限競争 unlimited competition が行なわれる」こと<sup>12)</sup>を前提とし、そのばあいには「地代は土地の『自然、から引き出される生産力〔『取得された沃度、ではない〕を超過することは、けっしてできない』と結論して<sup>13)</sup>、この「公正な競争の率 fair competition rates のもとにおける」地代を、『土地の自然地代、the natural rent of land と名づけた<sup>14)</sup>。かれはスミスの「自明単純な『自然的自由の体系、the obvious and simple system of natural liberty を考え<sup>15)</sup>、そのなかで「土壌の本原的、不可滅的な力」あるいは「自然的沃度」にたいして支払われるもの、さらにいいかえれば、さきに本稿で『本来の地代、と名づけたものを、「自然地代」と考えたのである。「『土地の本原的、不可滅的な力、の使用にたいして年々に与えられる額は、……所有者によって耕作されようと、借地人としてのほかのなにびとによって耕作されようと、それは土地の『自然、地代 the natural rent である』というわけである<sup>16)</sup>。

カードーズは、土地の所有権につき、「土地が大きな地積の所有者 proprietors となるひとびとによって所有される国の植民地」のばあいを想定し<sup>17)</sup>、そのばあいには「比較的により高い地代」が成立し、「もしも土地がその地代……にかんして、『無制限競争、の原則にしたがっていたならば取得せられるであろうものをこえて、取得せられるすべての地代の部分は、『独占地代、monopoly rent と名づけていい』とした<sup>18)</sup>。このことは、かれのばあい、アメリカ植民地において、州によっては独立戦争の時期までも存続した独占植民地 proprietary colonies の領主たちの封建的地代を

考えているものとおもわれる。カードゾじしんは、独占について「特殊の土壤から生産されるブドー酒のような、市場における特殊生産物の稀少」ということは、「自然法則による結果であって」、そういうことから起こる独占は、`自然的独占、*natural monopoly* である。また一方これと区別されたものとして、「地代に結びつく独占は、特殊の`社会制度、*social arrangements* から発生するものであって、……地代のばあいには、地主の得るところは、社会の残りのひとびとの失うところである」といつていた<sup>19)</sup>。しかし所有権なるものは、本来他人による物の占有、使用および処分を排除するものであって、その意味で独占的であるわけである。ゆえに、カードゾの`独占地代`というものはもちろん、かれの`自然地代、と名づけるものも、土地の自然的沃度を起原とするという意味では、`自然地代、とわけていいけれども、`所有権、を原因として`所有者、に帰属するという事実からしては、やはり独占的な地代であったわけである。

しかしカードゾは、こういった考え方には反対であって、「あらゆる事情のもとで、地代を独占の性質として考えるそれらの著者が引き出す結論には承服し難い」と<sup>20)</sup>、シスモンディ Jean Charles L. Sismondi de Sismondi がその著「商業上の富について」*De la richesse commerciale*. 1803で、地代は、あらゆる事情のもとで、普通の独占の格性をもつとしたこと、およびブカナン David Buchanan がかれの編輯したスミスの「諸国民の富」の第4巻 *Observations on the subjects treated of in Dr. Smith's Inquiry*. 1814 でおなじ意見をいっていることにたいして、それらは「土壤の本原的、不可滅的な力」（自然的沃度）にたいして支払われる本来の地代と「多くの国々における土地の所有と結びつく独占」による地代とを混同するものであるとして非難していた。そして「土壤の本原的な力にたいして支払われる地代は自然地代であるから、独占の行なわれる諸貨物がしたがう諸法則ではなく、資本の貸付 *loan* を規制する〔とおなじ自然的

自由の]の諸法則によって支配せられる」とした<sup>21)</sup>。かれはこのばあい、「あらゆる社会またはその近隣には、……賃銀と利潤との双方について、……また同様に地代の、普通率または平均率というものがある。……これらの普通率または平均率は、賃銀、利潤および地代の「自然率」とよんでもさしつかえなからう」といっているスミスの言葉を想い浮べているものとおもわれる<sup>22)</sup>。

そういった立場から、カードーズは、「地代が価格の一構成部分でなければならぬことは、必然的に明らかである。耕作費以上に生産物を産出する土地は、いずれもその使用にたいして支払われるところがなければ、所有者以外のだれにでも、耕作がゆるされるということはあるまい。この剰余はかれの所有権 property に属する。これに相当するものを支払わなくては、だれもそれを所有し、または使用することを許されないだろう。この剰余またはそれに等しい価値を支払うことが、他の耕作諸費用〔賃銀および利潤〕と同様に、原生産物の供給の諸条件の1つである」と結論した<sup>23)</sup>。

- 1) D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. The works. ed. Sraffa. vol. I. p. 69. 小泉訳, 上巻, p. 58 リカードは、「最初に耕作されるもっとも肥沃な土地」から「品質の劣った土地」に耕作が拡張せられるばあいにも, (Ibid. vol. I. p. 72. 小泉訳, 上巻, p. 62) 「もっとも野蠻な國よりもっとも開化した國にいたるまで, いまなおいずれの國においても〔アメリカをも含めて〕, その産出する生産物の価値が, 投ぜられた資本とその國における普通の利潤とを併せ償う程度を超過しえないという品質の土地が存在している」と言っている。(Ibid. vol. I. p. 328. 小泉訳, 下巻 p. 64.)
- 2) A. Smith: Wealth of nations. Cannan's ed. vol. I. p. 49. 大内, 松川訳, 「諸國民の富」(1) p. 185.
- 3) D. Ricardo: On the principles of political economy. The works. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 69. 小泉訳. 上巻, p. 58.
- 4) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 33.
- 5) 「第1級地を耕すことのみをもって足る新しい國では, 〔労働の賃銀を差し引いた〕「純」収穫は, 全部耕作者の所有に帰して, かれが前払いする資本の利潤と

- なるであろう。」(D. Ricardo: On the principles of political economy. The works ed. P. Sraffa. vol. I p.70. 小泉訳, 上巻, p.60)
- 6) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 31-32.
- 7) Ibid. p. 30.
- 8) A. Smith; Wealth of nations. Cannan's ed. vol. I. p. 52. 大内, 松川訳,  
(1) p. 189.
- 9) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 26.
- 10) Ibid. p. 26.
- 11) Ibid. p. 26.
- 12) Ibid. p. 29.
- 13) Ibid. p. 26.
- 14) Ibid. p. 27.
- 15) A. Smith: Wealth of nations. Cannan's ed. vol. I. p. 184. 大内, 松川訳,  
(3) p. 502.
- 16) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 36.
- 17) Ibid. p. 27. カードーズはさらに東洋の一部君主國のように, 主權者が土地の  
唯一の所有者であるばあいも考えている。(Ibid., p. 26.)
- 18) Ibid. p. 27-28
- 19) Ibid. p. 25. note.
- 20) Ibid. p. 36.
- 21) Ibid. p. 37.
- 22) A. Smith: Wealth of nations. Cannan's ed. vol. I. p. 57. 大内, 松川訳, (1)  
p. 201-02.
- 23) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 37-38.
- リカードが「地代はまったく穀物の価格の組成部分中に入らず, また入ること  
できないものである。……地代は貨物の価格の組成部分でない」としていること  
はだれも知るとおりである。(D. Ricardo: On the principles of political econo-  
my. The works ed. P. Sraffa. vol. I. p. 76-78 小泉訳, 上巻, p. 68.)

## IV

だれも知るように, リカードの差額地代に関する説明は, つぎのごとき  
ものであった。

「土地の使用にたいして地代が支払われるのは, 土地が量において無限な

らず、質において均一でなく、また人口が増加して品質が劣るか、あるいは位置が比較的便利でない土地が耕作に取り入れられることにのみよるのである。社会の発達上において、第2級の沃度をもつ土地が耕作せられるようになるときには、地代はただちに第1級の土地に初まり、その地代の額は、この両地の品質の差異に依存するだろう。

「第3級の土地が耕作されるようになると、地代はただちに第2級の土地に初まり、そしてそれは、まえと同じく、その生産力の差等によって左右され、同時に第1級の土地の地代は騰貴するだろう。人口の増加とともに、一国はその食物の供給を産出しえんがために、必らず品質劣等の土地に頼ることを余儀なくせられ、それとともに、すべてのより肥沃な土地の地代は騰貴するであろう。

「こうして、第1、第2、第3の土地が同一量の資本と労働との投下によって、穀物100、90および80クォターの「純収穫、a net produceを生ずるものと仮定せよ。人口に比較して肥沃な土地が十分であり、したがって、第1級の土地を耕すことだけで足りる新しい国では、「純収穫」は全部耕作者の所有に帰して、かれが前払いする資本の利潤となるだろう。

「人口が増加して、労働者の生活を支える以上には、わずか90クォターを収穫しうるに過ぎない第2級地を耕すことが必要となるようになれば、地代はただちに第1級の土地に発生するだろう。なぜならば、そのばあい、農業資本にたいして2個の利潤率が成立しなくてはならぬか、でなければ、10クォターもしくは10クォターの価値は、ある他の目的に充てるため、第1級地の収穫から控除されねばならぬからである。第1級地をその所有者が耕すと、他のなにびとかが耕すとを問わず、この10クォターは等しく地代を構成するであろう。なぜならば、第2級地の耕作者は、地代として10クォターを納めて第1級地を耕しても、なんらの地代も納めずして引きつづき第2級地を耕しても、いずれにしてもその資本で同一の結果を収めるであろうからである。

「第3級の土地がとって耕されるばあいには、第2級地の地代が10クォターもしくは10クォターの価値でなくてはならぬ一方、第1級地の地代は20クォターに騰貴しなければならない理由は、同様にして説明せられるであろう。」<sup>19</sup>

うえのリカードの理論では、第1に、100、90および80クォターは、各級土地の総生産物から、投下された等量の資本および労働としての支出を差し引いた純生産物の量であり、農業者の利潤の起原となる数量であること、第2に、農業者らの取得する利潤は、耕作が劣級の土地に拡張せられるにしたがって、100から90、80クォターへと減少してゆくこと、第3に、このように農業者たちの取得する利潤が低下するごとに、より優良の土地の利潤部分と劣級土地の純生産物との差額が地代に転化する、したがって、これらの差額としての地代は、耕作が劣級の土地に拡張せられるごとに、第1級地については0、10、20、第2級地については0、10、そして第3級地については0クォターと、増加してゆく——すなわちリカードの地代理論が差額地代を説明する理論であると称せられる所由である——こと、そして最後に、この差額としての地代＝差額地代は、純生産物から農業者らの要求する利潤を差し引いた剰余生産物である、したがって、それは生産費を構成せず、原生産物の価格に入らないこと、が明らかにされている。最後の点についていま少しく説明を加えれば、リカードは、長期的にみて人口は幾何級数的に増加し、それにたいして食糧品供給の成長は算術級数的であるというマルサスの人口論を、古典学派の他のひとびとともに原則として受け入れており<sup>20</sup>、かれにあっては、人口増加による穀物需要の増加、したがって、より劣級な土地への耕作は、必然的結果であった。地代は、このようにして、より劣級な土地が耕作され、穀物1単位当りの生産費が上昇する結果、より優れた級の土地の所有者に支払われるのであって、その反対に、地代が生じた結果、穀物1単位当り生産費も上昇したのではなかったのである。

カードゾもまた、「目的は違うが、リカード氏の例をとろう」と、地代の起原についてつぎのように説明した。

「<sup>3</sup>こうして、第1、第2、第3の土地が、同一量の資本と労働との投下によって、それぞれ穀物100、90および80クォター〔の純生産物〕を生ずるものと仮定せよ。<sup>3</sup>また60クォターが各品質〔の土地〕における<sup>3</sup>純収益、the net returns であると仮定せよ。

「地代を構成するであろう剰余は、第1級地では40、第2級地では30、そして第3級地では20クォターであるであろう。これらの諸部分は、これらの相異なる品質の土地の<sup>3</sup>本原的な生産力、the original productive power を測定するだろう。」<sup>3)</sup>

ここで注意をしておきたいのは、カードゾは、第1級地の40、第2級地の30および第3級地の20クォターを、「<sup>3</sup>地代を構成するであろう剰余、であり、それぞれの品質の土地の<sup>3</sup>本原的な生産力、を測定するであろう」といっているけれども、それらはリカードの地代理論における意味の剰余、ではないということである。<sup>3</sup>地代を構成するであろう、とせられるこれらの諸量は、リカードのばあいのように差額地代ではなくて、土地の本原的な自然的肥沃にたいして支払われる自然地代の絶対量である。かれはここでも、「地代は土壤の<sup>3</sup>本原的な力、〔そのもの〕にたいして支払われる」という、かれじしんの地代の定義——そしてそれはリカードが公式に与えた定義でもあった——を貫いているのである。だから、カードゾでは、「地代は、土地が〔第1級の土地であっても〕耕作に取り入れられる瞬間から初まる commence」ものであった。そして「その量は、土地が、耕作者の資本を、普通率の利潤および賃銀を含めて置きかえたうえで、そのうえに産出するであろう剰余によってきめられる。」これがカードゾの地代についての理論の根本に定在する基礎命題である<sup>4)</sup>。

さてカードゾは、このように地代の起原について説明しておいて、耕作が第1級の土地から第2級地に拡大せられるばあいについて、つぎのよ



うに論旨をすすめた。

「さて第2級の土地へたよることを必要とさせるように、人口が増加するときには、すでに行なわれている had taken place 農業上の熟練と科学の増加は、資本が第2級の土地に増加した収益を伴って投ぜられることを許すことだろう。資本が第2級地あるいは第1級地、そのいずれに投ぜられようとも、それは利潤に関してなんの差異も生じないだろう。〔うへの数字では、いずれも60クォターである。〕第2級地に投ぜられた資本は、第1級地に用いられたそれと、等しいように equally 生産的であり、比例的に proportionally より少ない、地代を less rent 伴うことであろう。

〔それらは第1級地では40、第2級地では30クォターである。〕しかし土地の広さが限定されており、おなじ土地表面で原生産物の分量に、恒常的追加をつづけてゆくことができないから、第2級の土地にたよられることになる。そのときに、第2級の土地が、同一の支出で、第1級地とおなじように生産的にまた有利にせられ得なかつたり、また第2級地の地主が第1級地の所有者よりも相対的により少ない地代を受け取ることを承知しなかつたりするならば、第2級の土地は耕作されないだろう。』<sup>5)</sup>

この文章は必ずしも了解せられやすく、明瞭であるとはいえない。カードゾは、あらかじめ第2級地のうゑに農業上の熟練および科学の増加が行なわれている had taken place ので、第2級の土地に資本がゝ増加した収益、を伴って投ぜられるだろう、といている。つまり、かれは、第2級地は第1級地よりも自然的沃度が劣っており、第1級地と等量の資本と労働とを第2級地に投じていたのでは、第1級地とおなじ純収益60クォターを挙げることはむづかしい、と考えている。第2級の土地に耕作が拡張されるためには、その第2級の土地に熟練および科学の増加がすでに行なわれており、したがってゝ取得せられた沃度、が、すなわち土地のゝ生産力、が、あらかじめ増加されていなければならない。第2級地にこの増加、農業改良があらかじめ行なわれているからこそ、この土地でも、第1級地

とおなじく60クォターの純収益が挙げえられ、第2級地に耕作が拡張されるのである。すなわちかれは、「劣級な土地は、これら農業上の諸改良が拡張せられるに比例して耕作におかれるのである」<sup>69</sup>ということを前提して、推論をすすめているのである。

この論理は、理論としては精密を欠くようにおもう。一国内において、技術の移動が自由であるかぎり、おなじより進歩した「熟練と科学」とが、第2級地と同様に第1級の土地にも適用され、そこで「取得された沃度、acquired fertility」を高め、利潤をさらに高めることが考えられるからである。しかしそれはそれとして、カードーズはこのように考えて「もしも等量の資本で、第2級地に、第1級地とおなじ大きさの収益を生ずるように、農業上の諸改良が〔あらかじめ〕行なわれていなかったとするならば、食物のなんらの追加量も供給せられ得ず、人口は停止することになるだろう。第3級地以下については、同じ原理を拡張してゆくことが必要なばかりである」と結論した<sup>70</sup>。

リカードの理論では、人口増加の圧力により耕作が劣級地に拡大せられるにしたがって、生産上の困難が増大し、利潤が低下し、地代は上昇する。一方(実質)賃銀は穀物で測って、不変ないしは低下の傾向にあるという<sup>80</sup>。しかも最劣級で挙げられる利潤のレベルで、利潤率が成立するというのであった。これにたいして、カードーズの理論では、耕作の拡大は、劣級地がたとえ土地に本原的な自然的沃度において劣っていても、さきに述べたような理由によって、そこにすでに農業上の熟練と科学が加わっており、その土地の劣性が「取得された沃度」によって補強され、その「生産力」を増し、優良地に等しい純収益の取得が可能となるときに、初めて行なわれる。したがって、純収益は、より劣級の土地が新しく耕作されることによって低下するというのではなく、不変に最高レベル——うへの例では60クォター——を維持するとせられる。一方地代(自然地代)は、より劣級の土地が耕作に取り入れられるにしたがって、それぞれの「自然的沃度、

に相応して、傾斜的にさまざまである。カードーズの例では、第1級地には40、第2級地には30、そして第3級地にたいしては20クォーターである。賃銀については、カードーズは、事物自然の状態では実質賃銀は上昇するといっているけれども<sup>9)</sup>、ここでは穀物で測った実質賃銀率の一定が前提せられていると解するのが論理的であるであろう。

- 1) D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. The works. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 70-71. 小泉訳, 上巻, p. 60.
- 2) Ibid. vol. I. p. 98 小泉訳, 上巻, p. 90-91.
- 3) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 34.
- 4) Ibid. p. 33-34. いうまでもなく、リカードでは「地代の開始 the commencement は、減少する沃度の土地が耕作に取り入れられるまで延期されていた。」(Ibid. p. 30)
- 5) Ibid. p. 34-35.
- 6) Ibid. p. 35.
- 7) Ibid. p. 35.
- 8) 「地主の利害はつねに……製造業者のそれと相反する。穀物の価格が永続的に騰貴しうるのは、これを生産するのに付加労働を要すること……によるものである。同じ原因は必らず地代を騰貴せしめ、……地主の利益となる。しかしながら製造家にとって、穀物の高価なことは利益でない。それは、穀物の高価格は高賃銀の原因となるけれども、しかしかれの製造品の価格は騰貴せしめないからである。」(D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. The works ed. P. Sraffa. vol. I. p. 335-36 小泉訳, 下巻, p. 72-73)  
 「労働者の運命は、……これほど幸福でない。なるほど、かれはより多くの貨幣賃銀を収めるに相違ないが、しかしかれの穀物賃銀は減少するであろう。……労働者の状態は一般に下降し、地主の状態はつねに改善されるであろう。」(Ibid. vol. I. p. 102-03 小泉訳, 上巻, p. 94-95)  
 カードーズは、リカードの所説をつぎのようにまとめている。「原生産物が増大した困難によって収獲せられ、労働者の食物が騰貴するときは、賃銀により多くが費されなければならない。この賃銀の増加は利潤からの控除である。」(J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 11.)
- 9) Ibid. p. 40.

## V

リカードの地代理論は、前節の終りに触れたように、「人口の増加と、その結果としての食物にたいする需要増加」の存在を仮定し、食物のより少ない比例量をしか生産しない、遞減する沃度の土地がつぎつぎに耕作に取り入れられ」そして「この過程において、利潤が各段階ごとに減少するであろう。」<sup>1)</sup> 「原生産物が増大した困難によって収穫され、労働者の食物が騰貴するときは、より多くのものが賃銀に支出されなければならない。この賃銀の増加は、利潤からの控除である」<sup>2)</sup> という主張を含むものであった。カードーズは、この原生産物の生産の困難が利潤を低下させるという見かたには反対であって、「それは自然の諸力を、農業上におけるより生産的な原因に転換させる、熟練および科学の影響についての、あらゆる考慮を無視する」ものであると考えた<sup>3)</sup>。アダム・スミスは、だれも知るように、「農業においては、自然もまた人間とならんで労働をし」<sup>4)</sup> 「製造業と商業とでは、自然の要因はなんの貢献もしない」<sup>5)</sup> とし、リカードでは、「自然は、農業ででも、人間の「科学と熟練」に援助されても、人間に貢献するところはない。」<sup>6)</sup> これにたいして、カードーズは、「自然の要因が、価値の創造において、人間の「労働および創意、the labour and ingenuity」と協力的 concurently である」ことを認めた<sup>7)</sup>。

言葉をかえれば、かれは、土地要因は人間の「熟練および科学」の増加により、かれのいわゆる「取得された沃度」を獲得しうる、と考え、その考へにしたがって、劣等地の純収益は、優良地のそのレベルにまでも引き上げることができる、と主張したのである。「この〔原生産物の〕供給の成長と増加とは、まったく土地の改良された処理に帰せられなければならぬということは、疑いもなく認められなければならない。」<sup>8)</sup> 「土地の上に加えられる努力を節約する農業上の諸改良が進行していない、という意見を支持する証拠はない」<sup>9)</sup>。「食物の追加量を産出するために劣等地

にたよらなければならないということが、農産物の比例的収量を伴わない費用の増加を伴う」という「新学説」の理論は、「科学および熟練が、農業において、商業および製造業においてと同様に、自然の大へんに有効な協力を得るについてもつ効果のほどを見落しているものだ」とかれはいつていた<sup>10)</sup>。

カードゾにとっては、土地は、普通の意味における「自然的要因」ではなく、機械の製造業におけるように、生産に際して用いられる、ひとつの道具であった。「ある特種の諸原理の適用、および「あらゆる技術に共通な、ある種の自然的諸性質や諸力の使用がなければ、土地に価値を与えるような物質の変化は、存在し得ない。」人間は、労働の助けがなくては、なにも完成することはできない。また土地は、空気や雨や太陽〔自然的要因〕が存在しなくては、またさらに、「物質の諸法則の「熟練した、skilful 適用」〔「熟練および学問の増加、＝諸原理」を伴わなくては、生産的な要因に転化されることはできない。「これらの諸要因なり諸原理は、それらが作用する土地とは、独立別個のものである。」製造業者は、かれが借りる<sup>かね</sup>お金を、かれの製品の原料やその労働者らの生活資料に変化する。そのさいかれが、これらの形態の変化をもたらした自然的諸要因の使用にたいして、かれが借りたもの〔貨幣〕の価値で、支払っているのであることを、だれが争うか。かれは、借地人が借り手であるというのとまったくおなじ意味で、「借り手」である。ただし大気の諸性質や、かれが労働をするさいにかれと協働する諸原理の借り手ではなくて、「かれが生産的な結果を産むさいに用いる「道具」の借り手である。土地は本質的にはこういった「道具、an instrument である。」というわけである<sup>11)</sup>。このような観点から、カードゾは、「農業は製造業の第1階段であるにほかならない」と考えた<sup>11)</sup>。農業は、リカードのいう「狩猟者がじぶんで作り、蓄積した」というわずかの「資本」さえ存在せず、また社会の職業が拡大されると「はじめて農業上に使用される粗末な機械」も供給されず<sup>12)</sup>、まし

てや「機械」の名に値いする立派な道具がまだ十分に利用されるに至らないで、土地のみを道具として用いる、製造業の初歩段階である、という意味である。

カードーズが、土地の本原的な力＝自然的沃度は増減を許さない、としたことは、さきに見たとおりである。かれは社会の進歩を、この力そのものの増進に期待しなかった。「[土壤の生産力の]自然的成長 *spontaneous growth* からする生活資料なり諸原料なりの量は、きわめて取るに足らぬものである。…だから、しばらく、農業に、地代の形で特別の剰余を許すように、製造業におけるよりも、より大きな再生産力があることを認めるとしても、その原因を、土壤じしんのなにかの諸性質に求めたり、土壤が「一般の物質、*matter in general* がもつよりも、物質界の諸法則なり自然の要因にたいしてより多く適合性をもつものである、などとは考えてはならない。」<sup>13)</sup>しかしかれは、社会の進歩を農業上の諸改良に、製造業におけるとおとらず期待したのであった。「自然はこの再生産力の諸要素を、最大の豊富さで、ひろく播き散らしている。かの女は、人間の知識の状態が、かれがかの女のサービスの利益を受け取る用意ができていることを示すときには、いつでもじぶんの力を人間の働きに結びつけるように待っている。この点に関して、自然は、一方の生産部門よりもいま一方の部門にたいして、すなわち農業にたいしてよりも製造業にたいして、なにをよけいにした[というの]か。かの女は双方のまえに、物質界の諸原理と諸性質とを、人類の用に役立ちうるように広げ並べているのである。」<sup>14)</sup>「諸資源を消費[の目的]に適當させ、準備するあらゆる物質の変更は、われわれの欲望、またはわれわれの享樂に役立つ諸技術と関係する、熟練か科学のいずれかの改良の新しい事例である。この点については農業、商業および製造業のあいだに区別はない」<sup>15)</sup>というのである。

かれはさらに、「生産者の創意諸力が農業において、製造業におけるとおなじように有効であると主張するのは、なにも新奇な原理を力説してい

ることではない。』<sup>16)</sup>「これは、製造業においてわれわれにそのすばらしい諸結果について、よく知られているかの原理の拡張にはほかならない」とい<sup>17)</sup>、「創意諸力が〔農業にも、また製造業にも〕平等に有効であるということは、農業とそのほかの職業とのあいだの利潤の均等あるいは利益の平等のために必要であるのである」<sup>18)</sup>と主張している。これは農業における各級の土地のあいだの利潤の平衡をいっているだけでなく、産業間の利潤の均衡を説いている発言として注目されている。

この土地要因の農業上の諸改良による、またはかれの言葉を用いて土地要因「熟練および科学」による生産力の増加の主張は、かれの理論全体—地代理論を含めて—のなかで、もっとも重要な点であった<sup>19)</sup>。かれは、自然要因の、人間の労働および創意への協働を認めない「あらゆる経済学諸理論は、必然的に誤った結論に導かざるを得ない」と考えていた<sup>20)</sup>。そしてかれは「耕作者の熟練および創意が、科学の諸方策と結びついて、土壤の諸力の減衰を十分に克服」した「証拠」を、「ヨーロッパの前回の大战」(対仏戦争)のあいだに<sup>21)</sup>、またその「歴史的証拠」を、1713年のユトレヒト条約後50年にわたるヨーロッパの穀物諸国、ことにフランスおよびイギリス——後者ではアイルランドを含んでであるが、300万の人口増加を伴っていた——における穀物の価格の低落のうちに<sup>22)</sup>見たとした。かれは「人口の増加が農業上の諸改良の大きさに依存し、これらの諸改良が拡大されるに正確に比例して、劣級地が耕作に取り入れられる」<sup>23)</sup> 調和的な社会の可能を考えていたのである。そしてカードゾをしてこういった構想に導いたものは、ひとつには、かれが遙かに見ていたイギリスにおける産業革命による諸改良すなわち生産力の発展であり、またとくには、資本の発達のおお初期段階にあり、したがって資本の限界生産力高く、またしたがって利潤のはなはだしく高率であったアメリカの後進国的特殊事情であったとおもわれる。

- 1) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 16.
- 2) Ibid. p. 11.
- 3) Ibid. p. 13.
- 4) Adam Smith: Wealth of nations. Cannan's ed. vol. I. p. 343. 大内, 松川  
訳, (2) p. 396. cf. D. Ricardo: On the principles of political economy. The  
works. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 76. note. 小泉訳, 上巻, p. 66, 註.
- 5) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 7.
- 6) Ibid. p. 7.
- 7) Ibid. p. 5.
- 8) J. N. Cardozo: Political economy—Rent. An article from the “Southern  
Review”, Feb. 1828. Kelley's reprint. p. 204.
- 9) Ibid. p. 203.
- 10) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 15.
- 11) J. N. Cardozo: Political economy—Rent. Kelley's reprint. p. 199-200.
- 12) D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. The  
works. ed. Seaffra. vol. I. p. 22, 24. 小泉訳, 上巻. p. 25, 27.
- 13) J. N. Cardozo: Political economy—Rent. kelley's reprint. p. 201-02.
- 14) Ibid. p.203.
- 15) J. N. Cardozo: Notes on political economy, p. 5-6.
- 16) Ibid. p. 36.
- 17) Ibid. p. 35.
- 18) Ibid. p. 36. cf. p. 35,
- 19) Ibid. Introduction by Joseph S. Dorfman. p. xi.
- 20) Ibid. p. 5.
- 21) Ibid. p. 17.
- 22) J. N. Cardozo: Political economy—Rent. Kelley's ed. p. 204.
- 23) J. N. Cardozo: Notes of political economy. p. 35.

## VI

この論文でもそうであるが、これまでリカードの地代理論のなかで述べられていた「地主の地代」は、「その交換価値、を問わない、全生産物の割合として」のそれ<sup>13)</sup>、すなわち穀物地代としての差額地代であった。



かれにはなお残された問題として、「生産上の困難というおなじ原因は、原生産物の「交換価値」を高め、また原料生産物中、地代として地主に支払われる「割合」を高めるから、地主は生産上の困難によって「2重の利益」を受けることが明白である。第1に、かれが収得する「分前」が増大し、第2に、地主がそれをもって支払いを受ける貨物は、「より大きな価値」をもつものとなる」<sup>19</sup> という命題、およびこれをいかえた「増大する人口を養うために劣等地が必要となるときには、地主の全収穫にたいする「分前」および収得する「価値」は、ともに累進的に増加する」<sup>20</sup> という命題があった。人口増大に伴う原生産物にたいする需要の増加は、以前よりもより劣級な土地の耕作を可能とし、すでに述べた理由によって、従来のより優れた土地の地主にたいして、新たな差額地代をもたらす。穀物価格が不変であるばあいにおいても、リカード理論によれば、地主が地代として受け取る穀物の絶対量は、こういったプロセスで増大する。これが穀物にたいする需要の増加によって地主階級にもたらされる所得効果である。また、より劣級な土地の耕作は、穀物にたいする需要の増加とあいまって、単位当り穀物を生産するのに必要な労働量を増大させ、穀物の価格を上昇させなければやまない。地主が現物（＝穀物）で地代を受け取るばあい、こういった穀物の価格の上昇は、同一の穀物量で支配できる他財の量を増加させる。これが穀物にたいする需要の増加によってもたらされた価格効果である。このばあいには、所得効果と価格効果とは同一の方向に作用し、地主が地代として受け取る実質所得を2重に増加させることになる。

リカードの理論は、以上の叙述に関するかぎり、極めて明快である。しかしながら、カードゾにとっては、リカードの理論は、必ずしも全面的に受け入れることのできないものであった。理由の第1は、リカードの理論に含まれる論理構造に求められ、第2は、地主にたいして支払われる地代が現物（穀物）地代ではなくて、貨幣地代であると、かれによって考え

られていることである。

まず第1の理由について、カードーゾはつぎのように述べている。「リカードの理論は、[原生産物にたいする]需要の増加と人口の増加の「仮定、に基礎をおいており、人口は増加しつつあるが、資本は減少しつつある<sup>3)</sup>ことを当然のこととして容認しているのである。それゆえに、穀物の価格の上昇は、「与えられた条件、*given* ではあり得ない。地代についての新理論の著者達（リカード学派のひとびと）は、実際にかれらじしん矛盾に陥っている。かれらは穀物の価格の上昇を生産の困難の「結果、とみなしておりながら、しかもかれらは、追加的生産にたいする需要が、そうあらねばならぬように、より劣級の土地の耕作に「先行、しているといっているのである。これは実際には、価格の上昇は、「原因、であると同時に「結果、であると述べていることである。かれらはまたつぎのようにいう、原生産物の価格は、追加量を取得する費用が増加されるから、上昇する。しかもこの追加量は、需要の増加と価格上昇の「結果として、生産されるのである、と。これは、価格の増加を、需要の増加の結果であるとしながら、同時に追加支出の結果であるとい見做していることである。」<sup>4)</sup>つまり、リカード理論は、穀物の価格の上昇は、一方においてより劣級な土地の耕作に伴う結果であると同時に、他方において、そのより劣級な土地の耕作を可能ならしめる原因である、とするものであるというのである。

カードーゾのこの主張は、リカードの理論にひそむ矛盾をついているかに見えるかも知れない。しかしここで取り扱われている事柄は、実際には、リカード理論にある矛盾というよりも、むしろ現象の短期と長期の関係であるようにおもわれる。人口増加による穀物への需要の増大にたいし、農業生産物における供給が必ずしも無限に弾力的であるというわけではない。だから、短期的には現存価格で穀物に超過需要が生ずる結果、穀物の価格を上昇させる。しかしこういった穀物の価格の上昇による利潤の増大は、より劣級の土地の耕作引き入れによる穀物の供給量の増大によって、穀物

価格を新しい均衡価格に引き下げる。しかしながらまた、この引き下げられた新均衡価格は、より劣級な土地の耕作による生産費の上昇により、人口増大を生ずる以前の均衡価格よりもより高くなくあってはならない、すなわちより低くあってはならない。これがリカード理論の真意である。

第2に、カード・ゾは、また、おそらくは当時のアメリカの現実に即してか、あるいは単に理論的に貨幣経済を前提してか、地主が貨幣地代を受け取れることを想定して、「地主は〔貨幣〕地代を、あらゆるばあいに、原生産物が市場で売られる価格に比例して受け取る。しかもこの価格はふたたびこういった生産物の需要と供給とのあいだの割合に依存する。しかし、どの貨物についてでも、その価格なり価値が増加したということは、正確につきの2つの定言のいずれかに等しい。すなわち、第1に、消費者が同一の貨幣量と交換に支配できる、こういった貨物の分量が減少する。また第2に、かれより大きな貨幣量と交換に支配できる貨物の分量が同じである。……もちろん地主の「貨幣、地代は、明瞭にかれの「穀物、地代と区別することができる。けれどもこの2つは、あらゆる事情のもとにおいて、逆比で騰落する。かれの貨幣地代は、原生産物の需要がその供給にたいしてもつ比によって支配される。かれの穀物地代とてもまた同様である。だから、かれは一方の仕方で得るところの一部を、いま一方の仕方で失うのである」といっていた<sup>5)</sup>。

ここで述べられていることは、より興味的である。地代が穀物地代ではなくて、貨幣地代で支払われるばあいに、もしも穀物の価格が上昇するならば、所得効果と価格効果とは反対の方向に作用する。すなわち、貨幣地代が、たとえ従前に比べて増加したとしても、それによる所得効果を通じての実質地代の増加の1部は、穀物の価格の上昇により、それが支配できる穀物の分量を減少させ、価格効果を通じて、相殺される。こうして、地主の所得効果を通じての実質所得増加の、すくなくとも1部は、価格効果を通じて資本家、ここでは農業家に移転されることになる。貨幣経済の進

展とともに、地代が穀物地代から貨幣地代に転化したばあいには、地主に支払われるはずの実質地代の1部は、こうした過程を通じて、地主から農業家=資本家に移転せられるであろう。

- 1) D. Ricardo: On the principles of political economy and taxation. The works. ed. P. Sraffa. vol. I. p. 83. 小泉訳, 上巻, p. 74. cf. J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 24.
- 2) D. Ricardo: On the principles of political economy. Sraffa's ed. vol. I. p. 403. 小泉訳, 下巻, p. 150-51. cf. J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 21.
- 3) 『地代の新理論』によれば、「遠からず、資本および人口2つながらの増加に限度がおかれなければならない。なぜなら、もしもなおも沃度の減退をつづけ、食物の比例的生産量を減少する土地が、つぎつぎに耕作に取り入れられるならば、この進行過程のあいだにおいて、利潤は一步毎に減退するであろうから、労働維持のための基金は、比例して減少しなければならない。」(ibid. p. 15-16)
- 4) Ibid. p. 24-25.
- 5) Ibid. p. 22-23.

## VII

カードーゾは、人口の増加による原生産物の需要の増加、したがって劣級地への耕作の拡大、その結果としての優良地における地代の増加、というリカードの論理に反対であったのである。カードーゾの地代理論においても、第1級の豊かな土地にたいしては、第2級のより劣級な土地にたいするよりは、より多くの地代が支払われなくてはならないが、それはめいめいの土地がもつ自然的沃度の差異によるものであって、地代はこういった自然的生産力に比例して支払われる。したがって、たとえ第2級の土地が耕作されないばあいでも、第1級の土地にたいしては地代が支払われており、また第2級の土地がたとえ新しく耕作されるようになったとしても、第1級の土地に支払われる地代が増加するわけではない。もちろん第2級

の土地にたいする地代は、第1級のそれよりも、より低くなくてはならない。この意味において、カードゾの地代理論は、たとえそれが各等級の土地にたいして地代に差異のあることをいっていても、リカードの差額地代についての理論とは厳密に区別されなくてはならないのである。

またカードゾの地代理論とリカードのそれとを区別するいまひとつの特色は、土地要素およびその原生産物にたいする需要の取り扱いにあるとおもわれる。カードゾは、「需要、に関係させることなく、土地を考察しても、真実の面で問題を提示することにならない」と考えていた。

「需要、を考えず、数量、だけでは、交換価値、に関して何ごとも決定することはできない。旧国の最悪の土地も新しい国の最良の土地も、価値に関しては、依然おなじ足場であって変らない。」<sup>1)</sup> カードゾは、前節で述べたように、需要の増加による穀物の価格の上昇、その結果としての〔貨幣〕地代の増加という、リカードの論理にも反対であったのである。かれはこのようにもいっていた。すなわち「土地の自然的諸力は、適切な需要を欠くために十分に利用されないことがあるかも知れない。そういったことは新しい国でも、古い国でもあることである。……しかしながら、土地に最高の自然的諸資源の存在することが認められ、かつそれらの資源が、適切な需要によって十分に引き出され、利用されつくしたとしても、それは地主にたいする剰余とはなんの関係（かかわり）もない」と<sup>2)</sup>。

ここで述べられていることどもは、明確にリカードの差額地代理論にたいする拒否である。カードゾの地代理論においては、現在耕作されているもっとも劣級な土地にも地代の生ずることを認め、のちに絶対地代と呼ばれるものの先駆的な主張を提供したが、それと同時に、それはリカードの差額地代理論の否定を意味する。異なる等級の土地にたいする地代の差異は、実は、おのおのの土地がもつ自然的生産力によってその大きさが決まる地代、カードゾの言葉を用いて「自然地代、の差額である。地代は、利潤、賃銀とならんで、商品価格の価値構成部分を構成する。それはリカ

ードのそれ（差額としての地代）のように，商品価格が利潤プラス賃銀の生産費を越えた結果として生じた剰余ではない。こうしてカードーズはその地代理論において，土地の沃度の「差」にかかわりのない，差額地代と区別せられるマルクスの絶対地代に相当するものを取り入れているのであって，そこにかれの功績を認めていいと思う<sup>3)</sup>。ただかれのばあいには，この地代部分の源泉が最劣級地の沃度の水準に求められるに対して，マルクスにあっては，労働による剰余価値の一部の，地主への再配分であると考えられているところに，大きな差異があり，かれのいうところ俗流経済学に属すると見られる理由も，存在したのである。

さらにまた，リカードでは，地代に関する理論がかれの労働価値理論体系への修正として現われているが，カードーズにあっては，それはかれの生産費説としての価格理論のなかに調和して組み入れられ，その一構成部分を成していることも，かれの地代の理論とリカードのそれとの差異を示すとともに，かれカードーズじしんの地代理論のいまひとつの大きな特色を示すものであるであろう。この点についてはなお別の機会に触れたいと思う。

1) J. N. Cardozo: Notes on political economy. p. 32.

2) J. N. Cardozo: Political economy—Rent. Kelley's repr. p. 201.

3) cf. K. Marx: Das Kapital. Bd. III. s. 810, 向坂逸郎訳, 「資本論」(十一) p. 251. ついでだが, マルクスも絶対地代は農業生産物の一般的市場価格を規定しうる一契機とみていた。(Ibid. Bd. III. s. 813. 向坂訳 (十一) p. 255.)

本稿は，本年（1965年）6月13日京都大学で行われた経済学史学会関西大会の共通論題「各国におけるイギリス古典学派の導入と展開」中，わたくしに割りあてられた「アメリカにおける」の報告を用意したさいに，思考のための資料として筆をとった草稿の1部である。